

金沢

かわら版

尾張町しこせ通りで

3

お座敷といふ具合にはじこして回る。お客も、團扇で羽織を裏返して余興をしてもよしとこがらせ、御祝儀をはぎな。

じこするは、客も裏返せば、ときどきお座敷を染しつうじこせると、何の区別もない。

石野 秀一「尾張町若手会

ドンツク」

お正月も松の内は茶屋(けいこ)さんも営業めそでを番、十六

久保市神社の奥から主計町(かすままち)へ下りる坂を、尾張町の古老の一人は「ひよどり越え」と呼ぶ。夕方、その坂を越すと澄明まで帰れないから、との理由から、奥方から言わせれば、「帰りたいくないのでしよう」とアイソムナイ(そっけない)。

茶屋町の「化け

尾張町の背中にあたるこの街は、昼間は静かだが、夕方からは活気が出てくる。茶屋街の明かりと、商店街の明かりの境目の坂は、また「暗がり坂」とも呼ばれたりする。

坂の階段を下り下り下りると、もちろんドンツクンシャンの音色が無ろ。そんな道を通って来るお客さんに秘すかしくないよう、芸事の稽古の仕上げをしているのだろうか。けいこ熱心で知られるところだし。

「見(いちけん)さんをあんまり歓迎しないのも、気心の知れた間柄になって、十分に装を披露して、もてなしたいため。だから筋道さえたてて身元を知ってもらおうと、お座敷の上では本気に染しめる。

「オーヤ、ドンドン、ツクツク、ドン。オーヤ、ドンツク、

好みの衣装着て 節分に座敷回り

目を過ぎてからは色留めそで姿になる。そして忙しい正月が一段階して節分になると、装股さんたちの染しみが得ている。

「口ひら、いろんな差し障りがあっても、このときはかりは別。パアッとかも忘れて、はじやき回る。平生の座敷着を脱ぎ捨てて、一度はなってみたい自分の思いの姿の衣装を着たりして。みんなそれを、「化け」と言っていて染しむ。

ひよつとこの面をかぶって把をまくりあげて踊ってみたり、



主計町

「ひよどり越え」の坂を下ると主計町。古くは「検番」と呼ばれた建物も今は「主計町事務所」の看板が